

保育効果の実験的研究

(その1) 生活指導

愛育研究所

村山 貞雄
高橋 種昭
植松 治子
多田 淑子

東京・栄光幼稚園

日名子 太郎

研究の目的 幼稚園で生活指導の方法として、④形式を与えて権威(約束や命令)に従わせるやり方と、⑧納得(功利的なものではない)によって自発的におこなわせるやり方とどちらがよいか実験的に調査しようとした。

実験の内容 生活指導の内容として (1) ねまきをきること。

(2) 夕飯の前に手を洗うこと。(3) あいさつをすることの三つ。

実験日 実験は昭和三三年一〇月下旬から約二か月。

実験幼稚園 実験を依頼し、それを完了させた幼稚園は、都内および大宮、横浜の六園である。

実験の結果 実験の結果わかったことは次のようである。

幼児全体の傾向としては、指示のしかたが権威的に形式を与えてそれに従わせるばあいと、納得によって自発的におこなわせるばあいとで、効果が差かない。

男子は納得により自発的にさせる方が効果があり、女子は権威的に形式を与えて従わせる方に効果がある。

三、四才のころは性差があきらかでなく男女ともに納得により自

発的におこなわせる方がより効果がある。

知能指数別にみると、知能指数の高いものも低いものも、ともに男子は納得によって自発的におこなわせるやり方に効果がみられ、女子は二つの方法による効果のちがいがあらわれない。

親の育児態度か過保護のばあいは、納得によって自発的にさせるやり方に効果が大きく、親の育児態度が放任のばあいは、権威的に形式を与えて従わせるやり方に効果がみられる。また親の育児態度が、過保護か放任のばあいは、性別による効果のちがいがみとめられない。

(その2) 絵画製作

実験目的 幼稚園における絵画指導は、一般的にいつて、幼児の自発性を重んじて、自由画の指導が効果的であるといわれている。

しかしこれは、科学的根拠があつて定義づけられたものとはいわれない。そして幼稚園によっては、今までのような、模写、あるいは課題のみの指導をして、効果を上げているというものも、少なくとも(以下略)一方家庭における幼児の絵画に対する態度や指導などのことも問題になる。これら問題とされている、絵画教育について、客観的な立場からみて、その指導方法と、教育効果の関係を実験的に調べてみようとした。

実験内容 A形式(課題画)による指導と、B形式(自由画)による指導をおこない、両方の差をみて、保育効果に、どのような影響があらわれるかをみようとした。(実験期間、実験方法、判定方法、結果は、一表から三表、保育学会フリップ七九頁〜八四頁参照。)

結果 (1) χ^2 検定法により、有意性の差を調べた結果、全体的に

は(A、B)組の差は統計的には認められない。

(2) 両グループに、課題画「お母さん」を描かせた結果の差は、自由組の方が、プラスの傾向が多い。

(3) 両グループに「好きな絵」について描かせ、調べた結果は、自由組の方が、やや下る傾向がみられるが、これだけでは何もいえない。

(4) 両組の効果の差と性別の関係を調べた結果は、男児の場合はA、B組とも効果が、マイナスになったものの割合でみると、A組の方に多く、この差を χ^2 検定した結果、統計的にも有意性が認められる。そこで、男の子の場合は、課題画による指導はあまり効果的ではない、ということが言えるのではないか。

(その3) 劇 あ そ び

実験目的 現在、多くの幼稚園で劇あそびをとり上げているが、それがむしろあそびとしてより、劇としての効果を期待し、著るしく正常な保育から逸脱した練習などをおこなわせている傾向があるので、この点につき実験的にその影響を求めてみようとした。

実験内容 被験者二〇名(男子一〇、女子一〇)を、等質的なA Bのグループに分け、Aには、脚本を与えて指示に従わせ、せりふ動作などを練習した後、発表させる。Bは、はじめ、自由あそびを重ね、グループ性を高め、後、絵本などから自発的に、せりふ、動作などを考えて発表させる。そして、その経過、結果を比較する。

劇には、「七匹の小羊」を使用

結果 (1) 評定尺度による態度の比較

参加、協力の態度では、自由型式がすぐれ、せりふの巧拙では、指導型式がすぐれている。他の項目では、ほとんど差がない。

| 性別 | 男 子 | 女 子 | 綜 合 |
|---------|-------------------|-------|-------|
| Group A | 平均 I・Q = 107.6 | 103.8 | 105.7 |
| Group B | 〃 113.4 | 110.6 | 112.0 |

決定的なことがいえない。

(2) 語いの変化

脚本中より選んだ四一語を実験前後、個人的に検査し、その理解しているか否かを比較した結果、自由グループの方が著るしく勝れている。また何れのグループとも女子の方がよい。グループ間においては、IQも考えなければならぬが(自由グループの方がやや高い)、性差ではIQと反対になっている。

(3) 劇効果 四〇名(教師と親を除く参加したもの)による無記名投票の結果、同率であった。

(4) I・Q、一〇〇前後では、両グループとも

保 育 と 発 達

(その1) 話し合い保育についての歴史的位置づけ

保育問題研究会 宍 戸 健 夫

「話し合い」保育をここで問題にしようとするのは、それが全く新しい試みだからというのではない。「話し合い」保育はそれが文字通りそう名づけられていなくても保育のなかでは必ずおこなわれていたことである。

明治期の「恩物」による保育でも、恩物を教えていくことは、「話し合い」であったし、子どもの概念形成への試みは今日も評価されてよいであろう。大正期に入って倉橋惣三の提唱した「個人対話」ということも大きな意義をもっていたといえるであろう。